
獣を喰らう獣

黒影 望月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣を喰らう獣

【Nコード】

N8342Q

【作者名】

黒影 望月

【あらすじ】

ある夏の昼、とある事件を聞く。それは近くで発生した殺人事件だった。そして死んだのは主人公、雅海ミヤウミの知っている人物だった。そして雅海も被害者に殺意を抱いていた一人だった。

切っ掛けの始まり（前書き）

初めてこのように小説を書きました。誤字脱字等あるかもしれませんが。分からない表現などもあると思います。その場合できるだけ速やかに直して行きたいと思います。気づいた方はお手数ですがお知らせお願いします。ちなみにこのストーリーに登場する人物、団体等の名前はフィクションであり、実在する人物や団体等とは関係ありません。

切っ掛けの始まり

俺はよく夢を見る。それも決まって悪夢。春の麗らかな日も、凍えるような冬の日も変わらない、そして蒸し暑い夏の日である今日も。

：目覚め？ そんなもん最悪に決まっている。ただ何年も経験してしまっていると、何も感じなくなってくるものだ。それにこの悪夢は絶叫しながら起きるような夢じゃない。もしそんな夢ならどれだけ救われたものか。

昔はたまに見ていた。ジェットコースターに乗っているような夢。だんだんと頂上へ上っていて一気に落ちながら加速する。そして、いいところで目覚める。

そんな夢なら一気に飛び起きて、笑い話にして終わり。そんなもんで終わっていただろう。

だが、この夢は誰にも話せない、いや、話したことはある。家族や友人ではないが…。

壁掛け時計を見るため顔を右に動かす。頬に冷たさと滑りのような感触を感じる。

いつものことさ、この布団にはたくさんの涎の跡がある。俺は特別拭くような仕草はせず、時計に視線をやる。昼の十一時半、いつもより少し早い起きよう。

布団を身体から剥がして居間へ向かう。テレビのリモコンの赤い電源ボタンを押して、座椅子に着席。

テレビから流れてきたのは殺人事件の進展に関することだった。

その事件はこの家から4〜5キロと、結構近場でおきた事件だった。「……と現場は監視カメラも無く人通りの少ない場所と言うこともあり、逃げ延びた少女以外の目撃者はおらず捜査は難航しています」テレビ画面の右下、そこには殺害された男の顔と名前、職業、年齢が書かれていた。

知っていた……。四年か五年か前、当時の顔と同じ……。

「…上垣…健志……。そうか……。死んだのか」

上を向き、大きなため息をついて一言、

「俺も、殺してやろうと思っていたのに」

切っ掛けの始まり（後書き）

読み終わった方へ。私のつたない、小説とも言いがたいかもしれない文章をお読みくださり、ありがとうございます。あつかましいかと存じますが、もし感想、今後のヒントなどがありましたらコメントの方をお願いします。

続きに関しましては、できるだけ早く書いていこうと思います。期待せずにお待ちいただければ幸いです。

なぜ、笑っていたのか。（前書き）

このストーリーに登場する人物、団体等は実在しません。フィクションです。実際にある人物、団体等とは関係ありません。

なぜ、笑っていたのか。

地図を頼りに歩く住宅街。車道と歩道を分ける白線をなぞるように歩く。車道を挟んだ向こう側には林があり、軽く森林浴をしているような空気が流れてくる。

駐車場のようなスペースが近くなってきた。そこには一台の自動販売機が置いてあった。

ここか殺人事件があった場所は……。ここで殺された……。

自販機の左隣には誰が置いたのか、花束と飲み物が置いてあった。俺は冷たいブラックコーヒーを自販機で買い、プルタブに指を引っ掛け開ける。そしてちびりちびりと飲みながらお供え物とその周辺を観察する。

そして想像する。ここで上垣は座り込んでいた。年下の少女と話をしながら。風の噂だとまだ中学生だったらしい女の子。その子とあいつはここで深夜の十二時にこの場所にいた。反抗期だった少女はたぶん親の決めた門限など守っていなかったのだろう。だから上垣と言う人間の女として一緒にいたのだろう。そうでなければ殺人事件の目撃者にはならなかっただろうに。

少女のことにに関して興味は無い。殺人事件に直面し、一生の傷が心に残ろうとどうでもいい。心配してほしかったら自分の行動に責任を持つてと言うことだ。それが子供でも同じ。

事件発生は2、3週間前、犯人はナイフを所持し、それで上垣を殺したらしい。何箇所も刺された跡があったとテレビで言っていた。

そしてあいつはどうしたかな？いきなり刺された？それともナイフをちらつかせているにもかかわらず喧嘩した？ありえない話じゃない。少女に良いところを見せ付けたくて挑んでいった線もある。もしくはビビって逃げようとしたところを刺された。これもありえる。おそらく、最後の選択が正解だろうな。何箇所も刺されているところから犯人は相当興奮していたはず。流石にそんな人間の気配に

はいくら鈍感な人間でも気づくだろう。あとは性格。上垣はそういう人間だった。最低のカスだ。少女を置いて逃げるのが一番想像することが簡単だった。

飲み終わったコーヒーの缶をそっとお供え物の中に紛れさせてその場を少しの間眺めていた。お前にはこれのほうが似合っている。そう思ってその場を去ろうとした時、

「待って、そのあなた」

誰かが誰かを呼び止めた。

振り返ると一人の女の子が立っていた。周りには他に人がいない。呼び止めたのはどうやら俺のことらしい。

「死んでいる人にそれはひどいんじゃない？」

その子はそう言うときき捨てた缶を拾って自販機右隣のゴミ箱に捨てた。

俺は無視して去ろうとすると、

「待って」

再び呼び止められた。再び振り返ると顔面に当たりそうな距離で何かを突きつけられた。一歩下がってそれを確認する。

それは警察手帳だった。顔写真も目の前の少女のものと一致した。

「私、こうゆう者です。ちょっとお話、いいですか？」

面倒なのに捉まってしまった。警察かよ。自慢ではないが、警察には嫌悪感と言うか背徳感と言うか、とにかく良い印象が無い。正直、嫌いである。

しかしこの目の前の少女にしか見えない人物が刑事とは、信じられない。身長じゃ俺のほうがかなり上だし、顔も童顔、服装もラフな上、胸も無いし、子供っぽいポニーテール。こんな人物に取り調べなどされても毛ほども怖くないだろう。子供に脅されて怖い大人などどこにしようか。

「あなたも、私が警察官ってこと信じられないとか言うの？」

どうやら目の動きで悟られてしまったらしい。

「正直に言っているんですか？」

「ああ、いい。行きつけのバーのマスターにも盛大に笑われているから。『おままごとの警察官か（笑）』って……」

少女…、ではなかった。警察官は警察手帳をポケットにしまい、ため息をついた。

「改めまして、北警察署の刑事です。少しお話を伺えませんか？」

北警察署とは、この地域の警察署のことだ。

警察官、刑事。そう言われて断って帰れる人間など何処にいますか。

「いいですよ。なにが知りたいんですか？」

俺は自販機にポケットから取り出した硬貨を投入しながら聞いた。

「とりあえず、ここでの事件のことだけ知っていますか？」

自販機からコーラの缶を取り出すと、開けながら知っている事を答えた。

「ほとんどテレビでやっていましたことですよ。被害者は上垣健志、二十一歳、神戸市北区葵町二丁目のここにおいて、深夜の十二時、自販機の前で十数か所の刺し傷がある状態で発見され、早急に救急車を呼んだがすでに死亡していた。発見者と言うか目撃者が一人、中学生の女の子が上垣とともに行動していて、逃げ延びていて犯人の顔を目撃。背格好は中肉中背の男性、顔は暗闇でよく見えなかったがサングラスをして髪は長くて肩まであった。……それぐらいですかね」

刑事は別段メモをとることもせず、俺の顔をじつと見ていた。

俺はしゃべり終わったのでコーラを喉に流し込んだ。

「そんなに飲んだら、お腹たばんたばんになっちゃうよ？」

見ていたのか、コーヒーを飲んだ時から。

「別に大丈夫ですよ。夏ですし、喉渴くんですよ」

「でもよく知っているね。ほかの人に聞いても被害者のフルネームなんて出てこないよ？」

コーラが缶の半分ぐらい残っている所で缶を口元から離れた。

「あなた、なんかありますね？」

しゃべりすぎた。そう思った瞬間にはもう遅かった。心の中で舌打ちした。

「正直にしゃべってください。隠さずに」

大きく息を吸い、一気にため息に変えて吐き出すと俺は唾を吐くように答えた。

「……高校の後輩なんです、上垣の。まあ上垣は中退しましたけどね」

それを聞いた刑事は、キョトンとしていた。鳩が豆鉄砲食らったような顔とはまさにこんな顔だろう。いろんな角度から観察してみたい衝動に駆られるが、やめておこう。

「……え、って事はあなた何歳？」

「二十歳です」

「……うそ、私より上だと思った……」

「よく言われます。あんたは年相応に見えないって。友達からも親からも」

友達からの「後ろ姿が定年間近の中年」と親からの「爺くさい」は心に深く突き刺さるものがあった。今も思い出すたび痛みがこみ上げてきそうだ。直そうたってどう直せば良いもんだか分らんし。

「いいなあ、私ももう少し年相応に見えたら飲み屋からつまみ出される心配も無いし……。日本酒頼んで、代わりにオレンジジュース出されることも無いのに……」

目の前の刑事も刑事で苦勞しているようだ。

「でも、やっぱり私の睨んだとおり知り合いだったんだね。被害者と……」

「あんまり良い印象は無かったんですがね。むしろ……」
「むしろ？」

「……いえ、なんでもありません」

「なんか、隠してない？」

「いえ、とにかくいい先輩と言うよりむかつく先輩だった。って事だけですよ」

「ふーん、そう」

刑事は少し腑に落ちないような表情をしていたが、そんな事知ったことでは無い。こっちはしたいことやり終えて帰りたい気分なのだ。その上刑事に名前とかその他もろもろ聞かれた時にはもう完全に職務質問ではないか。そんなことされた日にはブルーな気分全開になってしまいうだろう。

「あ、ついでだから名前と住所と、教えてくれるかな？」

完全にブルーだ。とうとう聞かれてしまった。せめてアレだけは聞かれないようにしないと…………。

「な、名前は玄野雅海^{くろの まさみ}、住所は北区工鈴台二丁目一番の20の15です」

刑事は名前と住所をメモ帳に書き取りはじめた。

頼む、職業は聞かないでくれ。

「職業は？」

「無職です」

もう、開き直るしかなかった。刑事の表情が哀れみに染まってくのが見て取れた。

「あ、の、なんかごめんね」

「気にしないでください。慣れていきますから」

畜生、慣れているわけ無いだろう。高校卒業からずっとこの言葉が突き刺さって日に日に痛みが大きくなっていく中でこの言葉は傷口に塩を塗りたくっているようなものだ。嗚呼そうですよ無職ですよ。フリーターでもありませんよ。でもニートではないよ。探してるもんアルバイト。働く意思の無い者をニートって言うんだってどこかの誰かが言ってたってどっかで聞いたもん。

「働く意思があるのでフリーターって事にしといてください」

「あ、う、うんわかった。そうしとく」

そう言うのと刑事はメモ帳に一生懸命に横線を入れていた。言わなければ無職ということになっていたのだろう。このことも心には深い傷となって残るだろう。せめてここからは話題を変えていこう。

「あの、事件ってどこまで調べているんですか？」

「ああ、そのこと。よく聞かれるんだよね。でもごめんね。捜査機密ってことでしゃべるの規制されているんだ。妙な噂も流すわけにもいかないし……」

まあ、そうだろうな。真実がつまびらかになるのは犯人が捕まってからと言うわけか。捕まるまでの期間は警察のお手並み拝見と言ったところだろうか。

「そうですか。じゃあ俺はもう帰っていいですか？」

「あ、待って、後一つだけ」

刑事はメモ帳を閉じてこっちを見た。

「なぜお供え物見て、笑っていたの？」

一瞬、夏なのに冷たい風が流れたような気がした。

俺は笑っていたのか、殺人事件の現場を見て。

想像した。自分のここで笑っていた顔を。それはコメディを見ているときの笑い方ではないし母親が子供に対する微笑でもない。ただ分ったのは、それはとても冷たくて、冷酷で……、心の奥深くからにじみ出た感情。

「さあ、気のせいじゃないんですか？」

平静を保って顔に感情を出さず、微笑で返す。

「表情、一瞬崩れたぞ、ああ？クロノ君」

刑事の吐く言葉には怒気が含まれていた。完全にばれている。しようがない切り札を使うしかようだ。

「気のせいですよ、『上垣』刑事」

刑事が微かにたじろいだように見えた。しかし視線はこっちを捕らえたまま離そうとしない。なるほど、少しは動揺しないように鍛えてはいるようだが、微かでも動揺は動揺、それで十分だった。

「……どこで知ったの？」

「あなた、はじめに顔に突きつけたじゃないですか、警察手帳。」

上垣刑事が心の中で舌打ちするのが見えた気がした。警察は身内の捜査はタブーだったはずだ。

「同じ苗字なだけです。それが何か？」

確かにそのとおりかもしれない。だがこの刑事には不振な点がある。

「それにおかしいじゃないですか？ 刑事って二人一組で捜査をするのをドラマでよく見ますけど？ あなた今一人でしょ？ それにもし犯人と対峙した時、あなたみたいな小柄な女性が犯人を組み伏せることなんてできないような気がするのですが」

嫌いと好きは似ている。嫌いな奴の行動ほどよく見ているし聞こえもするものだ。それに警察嫌いはそうだけど、刑事ドラマはよく見るし。ある程度は知っているつもりだ。

「今日はもういいでしょ。こっちは痛くもない腹探られて気分が悪いんです」

「……住所、ガセじゃないでしょうね？」

缶のコーラを飲み干し、ゴミ箱に入れる。

「大丈夫ですよ。ちゃんと合っています。何なら家までついてきますか？」

刑事は少し考え、

「いえ、結構」

と、短く返した。

「そうですか、それじゃ……」

刑事に背を向け、今度こそ家路に就く。

帰路の途中、俺は口元を触っていた。刑事が言った「なぜ笑っているの？」が心の中に響き続ける。なぜだろう、俺にも分からない。久々に話してみるか、あいつと。悪夢の中でしか会えない『もう一人の俺と』。

なぜ、笑っていたのか。 (後書き)

感想等ありましたら、書き込みよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8342q/>

獣を喰らう獣

2011年2月12日22時27分発行